

カンキツ黒点病のマンネブ剤を用いない薬剤防除体系の検討

1. はじめに

カンキツ黒点病は、果実に黒色の病斑を発生させ、外観品質を大きく損なう病害である（図1）。枯枝などで形成された病原菌が降雨により飛散して果実に感染するが、幼果期から秋季にかけて長期間感染することから、継続的に防除が必要である。

防除には耐雨性が高いマンゼブ剤やマンネブ剤が主に使用されているが、マンネブ剤が登録失効となる。そのため、マンネブ剤を用いない薬剤防除体系の確立に向けた試験を行っている。



図1 カンキツ黒点病

2. 試験方法

黒点病に登録のある Qoi 剤 (FRAC コード: 11) と有機銅剤 (同: M1) を中心に防除効果を調査している。ただし、水産動植物に対して影響の大きい有機銅剤は大規模スプリンクラーでは使用できない。

試験は、同一剤の連続散布と体系散布で行った。同一剤の連続散布では温州みかんまたは伊予柑を用いて約1ヵ月間隔で4回連続散布し、体系散布では温州みかんを用いてマンゼブ剤主体の薬剤防除体系において5月または7月に代替剤を散布して防除効果を比較した。

着色期以降に日本植物防疫協会の調査基準に準じて発病程度を無～甚の5段階で調査し、発病度と防除価を算出した（防除価は数値が大きい方が、効果が優れる）。

3. 結果

①連続散布試験

Qoi 剤では、ピリベンカルブ水和剤と比較

してクレソキシムメチル水和剤とテブコナゾール+トリフロキシストロビン水和剤の防除価が高くなった（図2）。有機銅剤の防除価は効果の高い Qoi 剤と比較して、同等～やや劣る防除価であった。

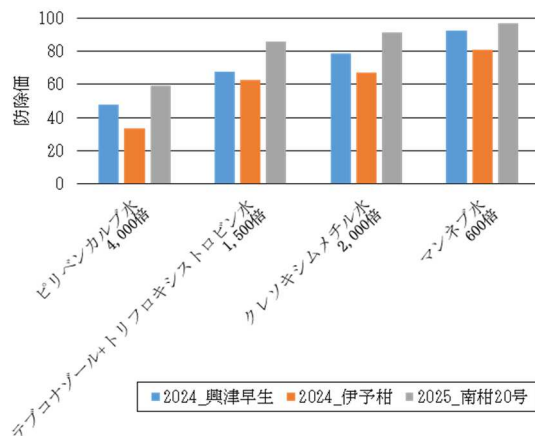


図2 連続散布による防除効果

②体系散布試験

降雨が多くない条件での試験であるが、宮川早生で5月または7月に代替剤を散布した防除体系（2カ年3事例）は、いずれもマンネブ剤を用いた現行の防除体系とほぼ同等の防除価であった（図3）。

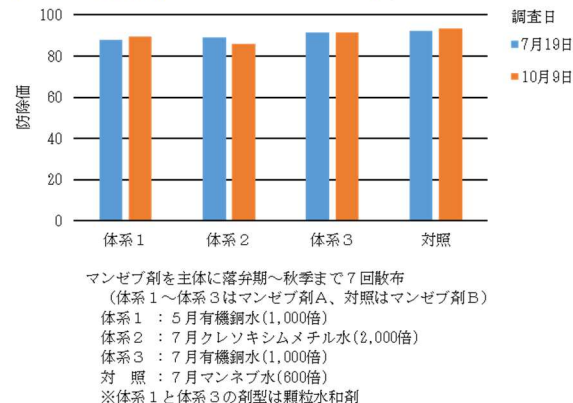


図3 体系散布による防除効果

4. まとめ

まだ評価試験の途中ではあるが、代替剤はマンネブ剤と比較すると、効果はやや低く、耐雨性は劣る傾向にある。また、気象条件の影響も考えられることから、さらに試験を繰り返すとともに、展着剤の加用による防除効果への影響試験などを行っている。

(病理昆虫室 主任研究員 青野 光男)